

その雨が降ったのは、雲一つ無い空の、ある晴れた日のことでした。

一九四五年八月六日の広島。朝七時頃に出されていた空襲警報が三十分ほどして解除され、人々は太陽まぶしい夏空のもと、一日をはじめていました。その空襲警報が、原子爆弾を投下するために気象観測をする一機のB29 によるものだったことを知らずに。

当時広島では、空襲に備えて重要な建物を残し一般市民の住居などを取り壊す、建物疎開が行われていました。その日の朝も、中学一・二年生の男女あわせて約八千四百人の子どもたちや近郊の市民組織一万人ほどが建物疎開の作業を行おうとしていました。人々の生活が動き出し、作業が始まった頃、午前八時十五分を迎えます。

B29爆撃機、通称「エノラ・ゲイ」が新型爆弾・ウラン型核爆弾を9 6 0 0メートル上空から投下、それは高度約5 8 0メートルで炸裂しました。ウランの核分裂反応による爆発は、数百万度の超高温となって「ピカ」と呼ばれた激しい閃光をもたらしました。

それは超高温の火の玉となって強烈な熱線と放射線を発生させ、熱によって急激に膨張した空気は衝撃波となって人々を襲いました。その衝撃波より先に爆発音を耳にした人は、その新型爆弾を「ピカドン」と呼びました。

「原爆ドーム」で知られる広島県産業奨励館のすぐ近くの島病院が爆心地といわれ、半径約二キロの範囲で木造家屋はほぼ全焼もしくは全壊しました。また、爆心地付近ではほぼ百パーセントの人が、半径一～二キロの範囲では半数の人々がその日のうちに亡くなったと推測されています。

『 禅のこころ -曹洞宗- 』

核爆弾の炸裂からおよそ二～三十分後、爆心地から北西の広範囲にかけて雨が降りました。その雨は、核分裂反応による放射性物質と残ったウラン、超高温の熱によって焼き尽くされたもののススや舞上げられたチリなどによって真っ黒でした。これが「黒い雨」です。場所によっては一時間以上降り続き、ピカドンの被害によって火傷や怪我をした人々は水を求めてその「黒い雨」を口にし、また家族を心配して戻った人々も、その放射性物質が多く含まれた「黒い雨」を体に浴びたのです。

もうすぐ八月六日。今年も広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式が行われます。平和記念公園にある原爆死没者慰霊碑に納められている名簿の人数は、二〇一八年現在、三一万四一八名。今年も数多くの方々が新たに名簿に加わります。

核兵器は、甚大な被害をもたらすと同時に長期間にわたり被害者を出し続けるのです。そして、その慰霊碑にはこの言葉が刻まれています。

「安らかに眠って下さい

過ちは繰返しませぬから」・・・と。

— 終 —